大阪学芸高校附属中学校
校　長　　森 松 浩 毅

2025 年度　附属中学校　学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

【学校像】

「豊かな人間性を育み、社会に貢献できる青年を育成する」という建学の精神をもとに 21 世紀を生きる子どもたちが知的社会で必要とされる「複雑な問題に対する解決能力」「クリティカルシンキング」「創造性」などの人工知能にはできない人間味のあるスキルを身につけるための教育を推進する。そのために、授業の形態ではなく「今何をしなければいけないのか」「どういう行動をとるべきなのか」を考えて学ぶアクティブラーニングを推奨する。しかし、その根底として我が国の教育を支えて生きた「座力の育成」を教育の「不易」なものと捉え、アクティブラーニングと対局をなすパッシブラーニングに対しても否定するのではなく、「流行」に流されることなく「座学」を確立し時代の変化に対応できる生徒を育成する。附属中学校においては「基本的生活習慣」の育成と定着(座力の育成)が将来の高校生活の基盤を形成するものと捉えて教育活動のあらゆる機会をとらえて育成を図っていく。

また、「国際化」が進む現代において、世界で活躍する人材の育成を念頭に「英語教育」「国際理解教育」を推進していく。特に、英語教育を進める上で「母国語」で物事を考えることの出来る「国語力」が重要であると位置づけ、自国の言語、自国の文化に対する学習を強化・育成する。

理系教育にも力を入れるため、100 周年記念会館を実験棟（サイエンスラボ）として改築した。1 階を多目的教室、2 階を生物実験室、3 階を化学実験室とし、基礎実験に対しての興味を持たせると共に実験の大切さを理解しスキルを養う。また、情報処理室を全面新設し３D プリンターやドローンを購入してプログラミング教育を充実させる。

さらに、高等学校の国際科ダブルディプロマコースに接続するため、ＤＤ進学コースの取り組みを開始することで国際理解教育を推進していく。

また、西館校舎の老朽化に伴い 2026 年度中の使用を目指し新館を建設する計画を進めていく。

【生徒像】

「気づく心」「考える力」「チャレンジ精神」を教育の 3 本柱とし、すべての教育活動を通して、次のような生徒を育成する。

○ 社会的規律を尊重し、豊かな情操を身につけた品位ある生徒　　○ お互いの人権を尊重し、学校や地域社会の中で協力・共同できる生徒

○ 自主的、自律的な学習態度で学力の向上をめざし、異文化に触れることによって、21 世紀を担う若者にふさわしい国際的な視野を持った生徒

※　真の国際人は自国の文化に深い知識を持つとともに、自らのアイデンティティーを見失わない視点で教育活動を推進する。

2　中期的目標

附属中学は各部・各学年で「基本的生活習慣の確立」を目標とし、附属中学生にとっては学芸高校への進学、そして高校へ進学をしてからクラスの中心としてリーダーシップを発揮できる生徒となることを目標としている。

※　外部評価機関の「授業評価、クラス経営評価、保護者からの評価アンケート」を実施・分析し数値を示して改善を図っていく。この数値は「プラス評価」－「マイナス評価」であらわされる「指数」となっている。

例えば、60 指数は 80%のプラス評価－20%のマイナス評価のことを指す。したがって**「60 指数以上」A、「59～20 指数以上」B、「19～－20 指数以下」C、「－20 以下」D** と考えて評価・分析する。指数と書いていない数値については%の割合表記。

※　校務分掌については高校と附属中学校は同一の組織として運営していく。

1　生徒指導を根幹に据えた学習指導と生徒のニーズに応えられる進路指導を推進する。

⑴ 基本的生活習慣の確立

学力向上の基盤は「基本的な生活習慣(座力)の確立」なくしてあり得ないという教育信念から昨年度に引き続き「気づく心の育成」「チャレンジ精神」「思考力の育成」に努め、自己管理能力(自制心)を高める。また、生徒を指導する教職員の資質を向上させるために機会あるごとに啓発を行って行く。特に附属中学校生徒については中学 3 年間で基本的生活習慣を確立させることが高校進学後の進路実現につながることを意識して指導していく。

ア、社会人としては許されない「遅刻」の防止に自ら努める「自己管理能力を育成」し時間を守ることの大切さを自覚させる。(自己管理)

イ、いじめを許さない学級、学年、学校「文化」を作り出し、生徒全員が安心して登校し学習できる学級・学校を目指す。(他者理解)

ウ、社会人として巣立つにふさわしい「服装・マナー」の向上に努め保護者から信頼される教育環境を作り出す。(教養育成)

エ、SNS やメールの使用上のマナーを含め、相手の立場を踏まえた適切なコミュニケーションが図れるように指導する。(人権育成)

特に一人一台のタブレットを持たせているのでその正しい使い方を指導していく。

オ、教育裁判の事例を職員会議等で示して教職員の危機管理能力を高めるとともに「危機管理マニュアル」を作成する。(危機管理)

⑵ 学力向上と進路実現

学力向上の基盤は、生徒の「自己管理能力の確立なくしてあり得ない」という教育信念から教科学習、講習等様々な教育活動を通して時間の使い方を学ばせるため「学芸手帳」(バーチカルタイプ)の利用を促進し生活習慣を見直し時間の使い方の工夫から短期・中期・長期と計画的に学習活動(クラブ活動も含む)をする習慣を定着させる。

※ 生徒は「iPad」を所持しているが、アナログの「学芸手帳」に書き込みことにより一層自分のスケジュールの管理や目標に向かっての進捗管理・やるべきことを確認する To Do List を意識しやすくしている。

この「自己管理能力」を高める中で保護者・生徒の願いである「学力向上」「生活指導・社会力向上」という目標を実現できるように進路ガイダンスを行い、希望進路の発見・実現に寄与するため教育課程を編成(選択授業での対応や多様な講習の実施)するとともに「i-pad(一人一台)」「Wi-Fi 環境の整備」「スタディ・サプリ」「スタディ・サプリ・イングリッシュ」「管理自習室の設置」を利用した授業・講習を通して自学自習を推進し授業改善にもつなげていく。従来の電子黒板は 70 インチの黒板上を左右に移動できる液晶型を設置していたが昨年度に最新式の電子黒板（天井からの投影型）に全教室入れ替えを行った。また、授業での利用だけでなくタブレット端末を利用した「職業調べ」「国際理解教育」(総合的な学習)を通してキャリア教育を進め将来展望に立った学習意欲の喚起を図っていく。

国際理解教育の推進のために英語 4 技能の育成を図るために英語授業だけでなく総合的な学習の時間における国際理解教育でネイティブ教員による授業を多く取り入れる。

「学習とクラブ活動」の両立をめざしながらも特に「英語教育」については重点を置き、中学校卒業段階で全員英検 3 級を目指す。

以上のように進路指導の基盤となる教員の授業力を高めていくため「生徒の授業アンケート」(年2回)と教職員間の相互授業参観等を実施し、授業内容の点検や教授法の改善の視点を知らせる。7月の調査で改善すべき点を示された多くの先生が2学期に改善を図る。

ア、教育のデジタル化に対応し「電子黒板」「i-pad」「スタディ・サプリ」「スタディ・サプリ・イングリッシュ」等の利用促進を行い授業改善に努める。

イ、グローバル化に対応した教育活動を展開するため英語教育の改善と国際理解教育の推進をさらに図っていく。

ウ、教員に対する生徒の授業アンケートを実施し「自己の授業の振り返り」を行わせ授業方法の自己点検を行うとともに授業力向上のための相互授業参観を行い「授業に対する信頼度」「学習効果への実感度」等を伸ばし生徒の満足度を高める。

エ、自ら課題を見つけ能動的に学ぶ習慣作りの一環として漢検・英検・数検などの資格試験受験の機会を増やす。

オ、生徒の多様なニーズに応えるために教育課程の編成、多様な講習の機会を設定し進路指導を充実させる。

カ、理系科目への興味関心を持たせるため、サイエンスラボでの実験を充実させる。

⑶ 社会に貢献できる資質の育成

「少子高齢化社会」「国際化」「外国人労働力の流入」「AIの進化」などの社会情勢の中、生徒たちは、自立・自律の精神とともに社会の中で自己を活かす精神と実力をもった大人として成長していかなければならない。生きていく社会の中で「自分は何ができるのか」「どう行動するのか」を考える視点を持たなければならない。本校がクラブ活動との両立を勧めているのも教科の学習だけではなく、学校行事やクラブ活動、ボランティア活動等を通してこれらの資質向上を図れると考えているからである。

特に子どもたちの生活の基盤となる「クラス」において互いに助け合う精神の確立が大切だという認識のもとに教育活動を行っていく。

ア、ボランティア活動やセレッソとのオフィシャルパートナー契約、地域清掃活動を通して社会への関心を高めるとともに奉仕の精神を育成する。国際ボランティアの取り組みとして公益財団法人大阪国際交流センターと提携し、留学生のイベント等にボランティアとして参加をする。また、大阪観光局とも連携し、海外からの教育旅行受け入れを実施するなど観光局の取り組みにも参加している。

イ、クラブ活動を活性化させ、勝利をめざし努力する過程で持続力や耐性を養い、仲間と協力しあう姿勢(協調性)を育成する。

ウ、体育大会や文化祭等の行事を通して他者への思いやりや自分の意見を分かるように相手に伝える力(コミュニケーション能力)、調整力を育成する。

エ、日々の授業に対する姿勢こそが「集中力を養う最適の手段」であり、学習とクラブ活動・奉仕活動・学校行事への取組等を両立する中でこそ「生活体験に基づいた生きた知識(智恵)を育成できるという観点で教育活動を進める。

2　保護者に信頼される学校づくり

⑴ 保護者への情報提供

「校区という地域」を持たない私立中学校は、保護者との連携をいかに図っていくかが大きな課題といえる。子どもが勉強や各種行事で活動する姿が見えるように情報発信の質を高めていくことが大切だと考える。その基盤となるのは子どもたちが担任をはじめ教職員を信頼し、学校生活を充実して過ごしている姿を家に帰ってきた子どもから保護者が感じることができるようにしなければならない。成績懇談や保護者集会を充実し、生徒や保護者が知りたい情報発信となるように情報の質を高めていく。

このために保護者対象のアンケートを行い、本校の教育活動の振り返りと改善点を明確にする。

ア、保護者の学校への信頼度(生徒・保護者へのきめ細かな対応と学校生活の充実)を高めていく。

イ、学校からの情報発信力を高め、ホームページの閲覧者数を向上させ、開かれた学校づくりを通して保護者との信頼関係を深める。

ウ、成績懇談や進路ガイダンスを充実し保護者・生徒に質の高い豊富な情報を発信し幅広い選択肢の中から進路を決めていくことのできる環境づくりに努めていく。

エ、インスタグラムを開設し、保護者への情報発信を充実させる。

⑵ 危機管理体制の確立

異常気象の表れと思われる局地的豪雨・巨大台風の上陸をはじめ、いつ来るかも知れない地震への対応を考え、生徒の安全を第一にした防災体制を地域社会とも連携し構築していくことが求められている。特に大和川の水位上昇で帰宅困難となった場合の対応を関係機関と連携し構築していく。

ア、避難訓練(火災時の避難経路と地震時の避難経路の区別)を通して集団で避難するときの心得を育成し、災害に備える。

イ、学校として帰宅難民となる生徒が出た時を想定した避難物資等の準備体制や保護者との連絡体制を整える。

また、日々の教育活動の中で「危険予見義務」と「危険回避義務」を教職員の使命と認識し、事故防止にも努める。万一の災害・事故に備えた保険についての知識を高め教職員賠償保険や第三者賠償保険等にも加入して教職員・生徒の保障に努める。

【自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

〈自己診断の結果と分析〉	＜学校評価委員会からの意見＞
1　基本的生活習慣の確立 保護者アンケート「生活指導は充実していて規範意識と自律性の育成に十分な効果をあげているか」という質問は附属中学校では 79%（昨年78%）の高い支持を受けている。この数字と比例して「この学校に入学させて良かった」という肯定回答が附属中で80%（昨年79%）の指示となって現れている。保護者が本校の教育に期待している項目に「生活指導・社会力向上」(学習指導・学力向上についで附属中で第2位)が入っているのと一致している。また、「本校の特色は何か」という質問で第1位が「子どもたちがいきいきと学習や部活に取り組んでいる」第2位が「クラブ活動と学習の両立」第3位が「いじめがないか、あっても芽のうちに防止してくれる学校」への評価が高いことから保護者の大半が子どもの学力向上・進路保障だけでなく本校の教育目標の「社会に貢献できる青年の育成」に賛同していることが分かる。 この目標達成のために「遅刻」「服装」等のルールの遵守を指導目標とし	1　基本的生活習慣の確立 ○保護者アンケートの「生活指導の充実」「規範意識と自律性の育成」に十分な効果をあげているという肯定回答が昨年に引き続き高い数値となっています。入学させて良かったという満足度が大きい人が多くみられるという結果で、順調に学校生活が送れていると思います。 この結果は附属中学校が掲げる「静かで落ち着いた学習環境の提供」という教育理念に合致していると思います。 ○「本校の特色は何か」という質問で「子どもたちがいきいきと 学習や部活に取り組んでいる」「クラブ活動と学習の両立」が上位にきている。この評価が高いことは、附属中学校の開設以来の教育目標とよく合致していて、教育の特色が保護者にしっかりと定着していることの表れだと大いに評価できます。 ○「いじめ行為」については、常にアンテナを高くしておかなければならない問題であると思います。保護者アンケート「差別やいじめがなく安全で安心

てきた。遅刻については、時間管理が出来なければならず、親に頼っていてはだめだということを機会あるごとに該当生徒やクラス指導で訴え、「遅刻は他人の時間を奪う行為」と言う意識の定着を図って行く。
また、附属中学校の生徒には「遅刻をしない」ではなく、「遅刻をしないためには何時に最寄りの駅に着いたら良いのか」「何時に家を出たら良いのか」というように具体的な生活計画を立てさせる。

遅刻・服装の指導だけではなく、挨拶をすることの大切さを話し、理解と納得があって自ら挨拶をするように話している。

いじめ行為は、保護者アンケート「差別やいじめがなく安全で安心して登校することができる」との回答が 81%（昨年 74%）と高い数値となっている。数値が少し下がっていたが、2022 年度 80%、2023 年度 75%と 2022 年度の数値まで戻すことができた。今後も早期発見を目指して 5 月と 11 月にアンケート調査・教育相談を行う。クラブ活動においても練習終了後、着替えた後のミーティングで生徒の様子を観察するように教職員を指導している。さらに、生活指導の事例を職員会議時にプリント配布し、日々注意喚起を教職員にする中で教員の生活指導力の向上にも努めてきた。

特に今の子どもたちは大人が想像する以上のストレスをためており、小さないじめが引き金となって自死するに至ることを考えこどもの言動に注意を払うように啓発していく。

また、2019 年のコロナウィルス感染症が収束してからも欠席に対するハードルが下がった状況が続いている。学校に登校することの意義や友人作りについても一層指導が必要になってくる。

一方、学校現場を悩ませている SNS については、i-pad を利用した教育活動が実施されており、「ソーシャル・メディア・ポリシーの確立」に向けて今年度も方針を明確にして取り組んできた。しかし、全くなくなるということはなく、継続的にクラス、学年集会、全校集会で訴えていく必要がある。

2　学力向上と進路実現

附属中の基本方針は「学習とクラブ活動の両立」である。
「子どものやる気を引き出し、学習活動に前向きに取り組んでいる」という質問についても肯定回答が 71%（昨年 68%）であり、「全科目にわたり学習指導は充実しており、学力向上に十分な成果を挙げている」という問い（保護者アンケート）についても 69%（昨年 64%）が肯定的な回答となっている。高い水準ではあるが、生徒たちにとって日々の授業で大切なのは学力向上実感であり学力向上は勿論、相関が大きい「先生の好感度」をあげる必要がある。「先生の好感度」については、全体では 62%（昨年 69%）であり高い水準となっている。しかし、昨年に比較して全体では 7 ポイント低下している。2 回の授業アンケートにおいて出された課題を各教員がいかに改善していくかが問われている。各教員に対して具体的な改善方針をレポートさせる等の取組が必要となる。

ハード面では、以前から全教室に電子黒板が設置され、Wi-Fi 環境も整えている。以前の電子黒板が古くなってきたことで、昨年度に最新式の電子黒板（天井からの投影型）に入れ替えを行った。また、全員がタブレット（i-Pad）を持っている。授業での活用や課題提出などで利用し、さらにスタディ・サプリ、スタディ・サプリ・イングリッシュを導入し、自学自習を促し学力向上を図っている。

新型コロナウィルス感染症の流行以前から積極的にオンライン授業や教育アプリを利用した。コロナ禍は勿論、全員がタブレットを所持し、Wi-Fi 環境を整備していたことで ICT 教育が浸透し、効果的な学習となっている。また、進路指導については、附属の中学校であるが併設の高等学校に進学する際も他校生と同様、高校受験（チャレンジテスト）を課している。「先取り教育をしない学校」である分、中学 3 年間の学習内容を定着させる取り組みを行う。特に受験を見据えた形で学習を行っていく。また、他校受験の生徒に対してもきめ細かく、進路相談を実施していく。

3　社会に貢献できる資質の育成

本校は、「勉強とクラブ活動の両立」を奨励している。これはクラブ活動を通して先輩と後輩の在り方、未熟な生徒にどのように教えれば向上するのか、そのためには自分はどのような背中を後輩に見せればよいのか等

して登校することができる」との回答が 81%で高い数字だが、引き続き丁寧に取り組んで欲しい。特に、いじめは顕在化しないことも多いので、「自己診断」に書かれているとおり、「アンケート調査」・「教育相談」・「クラブ活動後のミーティング」など生徒の観察を行い、あらゆる機会を捉えて「いじめの早期発見」を目指す姿勢を今後とも重視して戴きたいと思います。

○中学生は子供に近い年齢であるため、いじめにつながるちょっかいを出すケースがある。次の時間に授業がない先生は、職員室に戻らず教室や廊下で、たとえ 10 分でもよいので、先生が生徒の様子を見て話しかけることで、生徒も先生に対して徐々に話しかけるようになる。「最近どう？」「嫌なことはない？」などの声掛けが大切。面と向かって先生と話をすることが苦手な生徒とは、例えば窓からグランドを、先生と生徒が一緒に見ながら喋るなどの工夫が大切である。

○いじめにつながる「ＳＮＳによる嫌がらせ行為」も大きな課題です。安易なネットへの画像や動画の投稿が「自分や他者のプライバシーを侵害する」「投稿を見た人達から攻撃を受ける」等の事例も多くなっています。高校生や中学生は、判断能力も十分に備わっていません。「面白そうだから」とか、「別に問題ないと思った」という程度の理由で行なった投稿によって、自分自身が簡単に「被害者」にも「加害者」にもなり得る「危険性（怖さ）」につい て、集会等あらゆる機会をとらえ、継続的に指導を行なって頂けたらと思います。

○生徒アンケート「先生がいなくても服装やルールを守っているか」の項目は評価が C となっており、２・３年生が低い傾向がみられる。学校生活の慣れが気のゆるみを生んでいると思います。基本的な生活習慣を確立する上で、ルールを守ることや挨拶を行うことは大切です。引き続きご指導をよろしくお願いします。

2　学力向上と進路実現

○ 保護者アンケートで「子どものやる気を引き出し、学習活動に前向きに取り組んでいる」及び「全科目にわたり学習 指導や充実しており、学力向上に十分な成果を挙げている」の肯定回答が、70%前後で高い数値になっている。例年分析されていますが、生徒のアンケートの回答で、自分が感じる「学力向上実感」と先生への「好感度」の相関が大きいと思います。生徒が教員を判断するポイントとして「好感度」の比重が大きいことが分かりました。逆に、先生に対する好感度が下がれば、生徒の授業への取組み意欲は低下して行くことでしょう。

○自学自習の習慣を身につけさせるため、「ハード面」で特筆すべき点は、ＩＣＴ環境の充実です。高校と同じく、数年前より、すべての教室に電子黒板が設置され、生徒全員がタブレット端末を持っているという環境は大変優れていると思います。こうした電子ツールを授業での活用や課題提出で利用し、さらに「スタディ・サプリ」や「スタディ・サプリ・イングリッシュ」などの学習アプリを積極的に導入しておられるのは、大いに評価が出来ます。

○学校として、学習内容の先取りをせず、中学校の学習内容をしっかり定着させる方針はわかりやすい。学芸高校への進学だけでなく、他校への受験を希望する生徒もいる中で、きめ細かい進路指導をされていると思います。

3　社会に貢献できる資質の育成

○ 本校が「勉強とクラブ活動の両立」を掲げていることは、大変良いことだと評価します。クラブ活動は、様々な面で生徒の健全な育成を促すと思います。仲間との「共助意識」、地道な努力を続ける「忍耐力・継続力」、両立のバランスを図る「自己管理の能力」など、将来、社会に出た際に必要とされる資質を磨くことが出来ます。

○ボランティア活動に力を入れているのも、大変良いことだと思います。「セレ

を経験する中で真の奉仕の精神が生まれるものと確信しているからである。高校生とともにボランティアサークルを組織し、セレッソ大阪のホームゲームボランティアにも多くの生徒が参加した。子どもたちの心に「奉仕の精神」を醸成できたと考える。クラブ活動についても運動クラブだけでなく文化部の活動も多くなってきた。附属中学校の利点を活かし、高校生とともに活動することで技術面だけで無く大きく成長をしてくれ、逆に高校生にとっても中学生がいることがプラスに働いている。行事について、海外修学旅行も実施。文化祭や体育祭の取り組みを通して学年を超えた一体感を創っていくことができた。 **4　保護者への情報提供** 保護者アンケート「学校のホームページは充実していて必要な情報を得ることができる」の回答は 80%の肯定回答が得られた（昨年度 82%）。また、保護者から見て「担任は相談しやすく、親切に対応してくれる」というアンケートは 93%（昨年度 90%）、肯定回答を得ている。私学は、地域という「校区」を持たないため、学校から保護者への情報発信のあり方が保護者との信頼関係を築く上で非常に重要なものとなる。これらが「知り合いや親せきにこの学校を進めたい」という肯定回答を 80%（昨年度 79%）となって現れている。 また「懇談会は適切な頻度で行われており、学校の様子をうかがい知る機会として機能している」という保護者アンケートの肯定回答が 88%（昨年度 83%）となっている。昨年より 5%の増加となっている。その前からは 15%以上の向上となっている。以上から保護者との連携はまだ課題はあるとしても順調に推移しているとかんがえている。 **5　危機管理体制の確立** 本校は大和川以南からの通学者も多く、豪雨による氾濫・通行止めにより帰宅困難となる生徒が 3 分の 1 程度在籍する。このため、例年通り 4 月より各自に教室保管用の避難物資を購入し、その対応を図ることが出来た。この取り組みは今後も進めていきたい。	ッソ大阪」のホームゲームでのボランティアに多くの生徒が参加することで、生徒達の心に「奉仕の精神」を醸成することが出来たと思います。自分のことしか考えない「利己主義」ではなく、他者や周囲に対する思いやりの心を育む素晴らしい取り組みだと評価します。 ○ 附属中学校は、学校行事・クラブ活動ともに、高等学校に通う先輩とともに活動できる利点があります。公立中学校では実現が難しい点であり、これは附属中学校の教育の特色の一つだと考えます。少し年令の離れた先輩と後輩が互いに教え、学び合う関係性は、 教育のあるべき姿の一つではないかと思います。 **4　保護者への情報提供** ○保護者アンケートの「大阪学芸のホームページは充実していて必要な情報を得ることができる」の肯定回答が 80%、「担任は相談しやすく、親切に対応してくれる」の肯定回答が 93%と、昨年度より数ポイントアップしています。いずれも高い数値で大いに評価できます。 ○大阪学芸のホームページ画面は大変見易いレイアウト構成がなされていると思います。高等学校、附属中学校はそれぞれの色分けされており、まとまった印象を受けます。更に学校の取り組みについて、インスタグラムを活用しタイムリーに発信しているのは、特に本校を希望する中学生にとって効果的だと思います。 ○その他、「学芸新聞」の発行や「さくら連絡網」など、目的に応じた様々な情報提供の媒体が用意されています。私学は、地域という「校区」を持たないため、情報発信のあり方が非常に重要だと思います。生徒・教員・保護者の三者連携を円滑にすることは、教育目標を達成して行く上で不可欠の要素だと考えます。 **5　危機管理体制の確立** ○ここ数年、自然災害の頻度、規模が拡大しており、夏季の豪雨は常態化して来ています。大和川の氾濫や通行止めによる生徒の帰宅困難事態はいつ起こっても不思議ではありません。こうした事態に備えて避難物資を購入し、教室で保管する取り組みは高く評価できます ○「災害は必ず起こる」という意識のもと、危機管理体制の確立を一層の図って戴きたいと思います。

3　本年度の取組内容及び自己評価

中期目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 基本的生活習慣の確立	**1 規律ある学校生活の確立** (1) 規範意識と自立性の育成 (2) いじめを許さない学校づくり (3) 教職員の学級経営・生徒対応能力の向上 以上の三項目を達成する中で学習環境を整え学力向上をめざします。 附属中学校の設立趣旨は子どもたちに「落ち着いた教育環境」を保障することにある。 この教育目標実現のための教育活動を展開する。	附属中学校の設立趣旨にあるように「落ち着いた学習環境」を整え、私学の最大の教育目標である「学力保障」をする。 クラス・学年の秩序は真面目な生徒たちによって支えられているという認識のもとに校則をきっちりと守り、気づく心を持って困っている人たちに声を掛けることのできる生徒を育成する。 (1) 風紀週間・下校指導・服装違反の点検を定期的に実施し、生徒の規範意識向上を図る。 ○指導カードの発行による啓発 (2)「いじめアンケート」を実施し、担任・学年主任・生活指導部・管理職による点検で共通認識を図りいじめを許さない学校づくりに専念する。 ○いじめ対策委員会の実施 (3) 学級の係活動や清掃活動を協力して行う雰囲気を作り真面目な生徒が損をしない、担任に不信感を抱	(1) 現在の学校生活について「規則正しい生活を送れる」という指数を 60 以上とする。 (2) 学校生活全般を通じて「この学校には、いじめは少ない」という指数を 60 以上とする。 (3) 学級経営において ①「生徒の態度や行動が間違っているときはきちんと叱ってくれるし、感情的にならず生徒が理解できるように配慮してくれる」指数を 50 以上とする。 ②「生徒間のトラブルは少なくクラスメートを大切にする風土がある」という指数を 60 以上とする。 (4)「良い友人が多い」という指数を 60 以上とする。 (5) 担任は「クラス生徒全	(1) 1 年 89、2 年 61、3 年 60、全体で 71 となっている。(昨年 60、一昨年 55) であり大きく改善されている。コロナ禍の影響で遅刻や欠席が多く、社会的な問題となっている。この傾向は今後も続くと考えられるが、重要課題として取り組む必要がある。 (2) 1 年 65、2 年 55、3 年 23、全体で 49（昨年 52、一昨年 49) 昨年の 2 年生が 27 で今年度も 3 年生が 23 と落ち込んでいる。実際にトラブルのあった学年であり、改善が難しくなっている。さらに担任を中心にきめ細かく見ていく必要がある。より高い質の意識向上を図るために「いじめアンケート」の実施と全体指導をしていく。 (3)①1 年 73、2 年 72、3 年 32、全体で 60 となり昨年が全体で 63 であった。1・2 年生は大幅に改善している。 ②1 年 24、2 年 30、3 年 27、全体で 27（昨年 27）となっており昨年と同様である。目標指数には差があり改善していく必要がある。他人の気持ちを考えた行動・発言ができていない生徒の増加が見られる。継続して指導していく必要がある。 (4) 良い友人が多いという評価では満足度指数が 1 年 86、2 年 80、3 年 69、全体で 79（昨年 79、一

		かない学級づくりを行う。 　また、生徒の人間関係を深めクラスと言う仲間育成の場で担任のきめ細やかなリードのもとに子どもたちの良さを引き出すことのできる担任力を育成する。	員と話す機会を持とうとしている」という指数を40以上とする。 (6)担任は「ホームルーム活動が充実して行えるように工夫してくれる」という指数を50以上とする。 (7)「クラス全体で取り組む活動を通して一体感が持てるように指導してくれる」という指数を45以上とする。	昨年64）と改善し維持している。友人関係の作り方が難しい生徒が増加している傾向は今後も変わらないと思われるので、学校行事等を通じて「協力する心」を一層養っていく必要がある。 (5)1年65、2年31、3年72、全体で56（昨年55）と高い数値を示している。 (6) 1年47、2年32、3年18、全体で33（昨年31）と目標を達成できていない。HR活動を改善していく必要がある。 (7) 1年66、2年60、3年58、全体で62（昨年52）となり、大幅に良くなり目標の45も達成している。昨年の2年生が達成できていなかったが、今年の3年生では大幅な改善が見られる。学校行事が実施されることで生徒の経験になっている。学校教育における行事の大切さがわかる結果となっている。
2学力向上と進路実現	**2 学力向上と進路実現に向けた取り組み** (1)生徒による授業満足度の向上 ○　授業アンケート ○　教育のデジタル化 電子黒板（最新の設備に更新）とタブレット利用の促進 ○　英語教育の改善 (2)自学自習の態度を養成し意欲的に学習する姿勢を身に着ける。 ○　スタディ・サプリ・管理自習室の利用促進 ○　英検・漢検等資格試験受験の促進 (3)希望進路の発見と実現に寄与する。 ○　国際理解教育の促進 ○　多様な講習の充実	附属中の設立趣旨は高校進学後につまづかない基礎学力の定着である。このため教師の授業力向上は本校教育の根幹をなすと認識している。 授業力評価のアンケートを分析すると授業を受けて「学力向上実感」があると評価された先生は「好感度」においても高い数値をあげています。この保護者の信託に応えるために次のような取組をおこなう。 (1) 授業力の向上をめざし、7月実施の1回目の授業評価で「何が評価を下げる原因となっているのか」「どの点を改善すればよいのか」を自己研鑽させ、2回目の授業評価で数値改善をはかっている。また、主任を中心に担任・教科担任がクラスの授業の状態を把握し、問題がある場合はすぐに改善策を打つ体制を整備する。 (2)デジタル教科書が急速に普及してくることに対応して全館整備が終了した電子黒板に加え、i-padを利用し授業改善に取り組む。 オンライン授業、双方向学習を実施。(Google Classroom、ロイロノート、等を活用) (3)スタディ・サプリ、スタディ・サプリ・イングリッシュを導入し生徒の学習環境を整え自学自習を推進する。 (4)英検・漢検等の資格取得者を増やしていく。	(1)相互授業参観を実施する。 授業アンケートを実施し次の項目のプラス指数を向上させる。 (2)教員の「好感度指数」を60以上とする。 (3)「先生の授業を受けることにより学力や知識の向上を実感できる」という学力向上実感指数を60以上とする。 (4)クラスにおいて「授業時間は集中して授業を受ける生徒が多い」という指数を60以上とする。 (5)「全科目にわたり学習指導は充実しており、学力向上に十分な成果をあげている」という保護者アンケートの肯定的意見を 60以上とする。 (6)「子ども達のやる気が引き出され、学習活動に前向きに取り組んでいる」という指数を 40 以上とする。 (7)「授業の理解度」という指数を60以上とする。 (8)電子黒板を利用した公開授業、タブレットを使用した授業研究を年 2 回実施する。 (9)英検3級以上の資格保持者75%以上とします。 (10)スタディ・サプリの初期設定ログイン 95%を目指す。 (11)英語教育改善の方策を打ち出す。	(1)教育は指導者の力によるところが大きい。このため、指導力のある教員が新任教員を指導する体制の確立が急がれる。「授業参観レポート」を作成し相互授業参観を昨年度に続き実施したが、普段の授業で互いにコミュニケーションをとって点検しあい高め合うまでには至っていない。また、教科会で指導案等の点検・意見交換等もはかられていない。 (2)教員の生徒からの好感度と学力は比例するものである。62指数（昨年69）となっている。好感度は学力向上実感とも相関があるため、更なる改善が必要である。 (3)学力向上実感は47指数(一昨年56、昨年45)となっている。目標数値の60を超えるように一層の努力を要する。 (4)指数としては1年－23、2年12、3年－5、全体で－6（昨年35）となっている。集中して受けていると回答した生徒に対して授業中に関係ない行動をする生徒がいると回答した生徒が上回っている状況を改善することが急務である。特に1年生のマイナス23という指数が気になる。1年生は小学校から上がったばかりなので、中学生活に慣れていないのかと思う。授業の姿勢が学力向上には欠かせないため、早急に改善する必要がある。 (5)肯定的な回答が69（一昨年71、昨年64）であったのに対し否定回答が27（一昨年23、昨年30）となっている。4年続けて徐々にではあるが数値は上がっていたが今年度に若干下がってしまった。保護者の感じ方に差があるため、きめ細かく生徒を見ていく必要がある。 (6)肯定的意見に回答してくれた保護者は 71 指数（昨年68、一昨年72）となっている。 (7)1年72、2年72、3年64で全体では70（一昨年75、昨年66）となっている。 今年は学年のばらつきもなく、目標が達成できている。 (8)コロナウィルス感染症の影響により各教科・教員での利用について大きく改善された。使用しなければならない状況下でICT教育・タブレット利用については大きな進歩をしている。今後も一層効率的な利用をしていく必要がある。 (9)英検3級以上の合格者は26%（昨年32%）で目標ラインに比べてかなり低い。英検は2級を持っ

				ていると大学受験に非常に有利であるため、中学生であっても大学進学を見据えて英検、数検、漢検の資格を頑張って取得する意識付けと共に、一層の努力が必要である。 (10)本校の教育の柱となる「自学自習」を進めるためのスタディ・サプリのログイン数は 100%となっており当初の目標は達成されている。 (11)週 6 時間の英語授業の内、教科書内容については 4 時間。残りの 2 時間についてはネイティヴ教員と分担をしながら授業を進め、4 技能に対応する英語教育を行っている。また、総合学習の中で国際理解教育を 2 時間実施し、様々な調べ学習や発表も行っている。さらに接続する高等学校ダブルディプロマコースに進学するためのＤＤ進学コースを放課後に実施する。
3 信頼される学校づくり	**3　社会性の育成** (1)助け合う雰囲気あふれるクラスづくり (2)部活動の活性化 (3)ボランティア活動の充実 (4)学校行事の充実	学校教育の目的は、教科指導による学力の向上とともに多様な体験活動を通して集団の中で協調性や耐性、社会性を育てることも大切な使命である。本校が「両立」を合言葉に部活動を推奨している理由もここにある。 (1)クラス経営力を向上させるため学年会での相互点検・改善を進める。 (2)クラブ活動の成績と普段の学校生活は密接に関係することを指導しクラブと学習の両立を図る。 (3)ボランティア活動の充実 地域清掃を定期的に行い、ボランティアサークルでは大阪マラソンボランティア活動への参加やセレッソ大阪ホームゲームでのボランティア活動を進める。 (4)生徒の自主性を育てる学校行事を促進する。	(1)①「クラス全体の結束力が強く行事の中で達成感や一体感があると感じることが多い」②「困っているクラスメートがいれば誰に対しても手助けをする生徒が多い」という指数を 60 以上とする。 (2)「部活動が盛んで、部活動に関して熱心な指導が行われている。」という保護者アンケートの数値を 60 以上とする。 (3)「学校はいろんなことを体験させてくれる」という指数を 60 以上とする。	①　1 年 66（一昨年 48、昨年 82)、2 年 60（一昨年 60、昨年 20)、3 年 58（一昨年 66、昨年 48)、全体で 62（一昨年 58、昨年 52）指数という結果が出た。徐々にではあるが改善をし、今年度目標を達成できた。 ②1 年 50、2 年 27、3 年 12 指数、全体で 30（一昨年 41、昨年 33）となっている。徐々に下がっており、「他人を思いやる心」を育てる教育が早急に必要である。継続して教育していく必要がある。 (2)肯定回答 70 に対して、否定回答が 20 となっており 50 指数で目標である 60 を若干切っている。 (3)1 年 87（一昨年 85、昨年 78)、2 年 70（一昨年 78、昨年 67)、3 年 53（一昨年 53、昨年 47)、全体で 71（一昨年 72、昨年 66）となっている。
	3 保護者との信頼関係の醸成 (1)保護者と信頼関係の構築 ○　ホームページの充実 ○　学芸新聞の発行 ○　進路だよりの発行 (2)防災教育への取り組み	附属中学校の保護者は地元の公立中学校に通学させないで遠い私学に子どもを通わせていることを考えると保護者との連携は高校以上に密にしなければならない。家庭訪問に変わる「保護者集会」「学級懇談会」「授業参観」等を計画的に実施し、「わが子の様子が見える」学校にする。 また、防災訓練等の安全生活に対する取組も緊急の課題であるという認識している。 (1)担任のきめ細かな対応 体罰・暴言のないクラス・クラブ経営と教科指導を確立するための職員会議等を通した啓発活動を進める。 (2)ホームページの充実 ニュース、トピックスにて更新内容を周知する。 (3)授業参観や進路・生活指導についての保護者集会を充実	(1)「授業参観や懇談会は適切な頻度で行われていて学校の様子をうかがい知る機会として機能している」という保護者アンケートの肯定意見を 60 以上とする。 (2)「入学前と入学後の学校のイメージは子どもに聞くと良くなった。この学校に入学させて良かった」という数値を 40 以上とする。 (3)担任は「生徒に対する言葉遣いや態度は丁寧で適切であると感じることが多いし、保護者らも誠実に対応してくれる」という肯定回答を 80%以上とする (4)「学校は一人ひとりの生徒を大切にしてくれる」	(1)88%（昨年度 83%）の肯定意見があった。肯定意見が目標に対して大きく上回っている。 (2)生徒の「入学前よりもイメージが良くなった」という指数が 1 年 68、2 年 61、3 年 30、全体で 55（一昨年 30、昨年 52）となっている。指数であるため B 評価となっているが、一昨年より大幅に改善された。 (3)生徒の回答としては肯定－否定の数値が 1 年 27（一昨年 38、昨年 39)、2 年 39（一昨年 26、昨年 37)、3 年 1（一昨年 40、昨年 12）で全体としても 23（一昨年 34、昨年 32）となっている。改善するように努めていきたい。保護者の回答については肯定回答が 93%（一昨年 89%、昨年 90%）であった。厳しく指導する際の保護者と生徒の感じ方にギャップがあり、生徒に対しても独りよがりの指導にならないよう注意する必要がある。特に電話対応のきめ細かさが大切であり、家庭訪問のない私立学校では 4 月当初、懇談までに各家庭に担任から挨拶の電話を入れるように取組をさらに進めたい。 (4)1 年 97、2 年 82、3 年 44、全体で 76（一昨年 65、昨年 71）指数となり各学年とも高い数値であ

		教員と保護者の距離感を縮め話しやすい環境づくりを行う。 (4) 保護者が学校行事に来やすい環境を作る。 (5) 学芸新聞の発行 (6) 防災教育の充実 ○避難訓練(火災時と地震時に分けて)の実施と防災備品の整備を行う。 また、附属中学生は電車等で通学している生徒も多く、災害発生時に帰宅困難となることも想定し防災グッズを常備する。	という数値を 45 以上とする。 (5)学校からの情報発信源となるホームページの閲覧数を 20,000/月以上とする。 (6)大和川決壊や地震等災害による帰宅困難者対応を引き続き行います。	った。本校の特色は丁寧できめ細やかな対応にあると考えている。より一層きめ細やかに生徒を見ていく必要がある。今後もこの方針を曲げないように教職員に啓発を続けて行くことが大切。 (5)学校のホームページが充実していると考えている保護者は 80(昨年 82)と高い評価となっている。ホームページの閲覧者数の月平均は 7,167 回（昨年 7,620 回）であり、目標を大きく下回ってしまった。昨年度からは改善が見られるが、劇的に増加させる方法を取り組む必要がある。 (6)昨年度に続き災害避難物資もすべての生徒に配布し教室保管することができている。教室に配置された備蓄物資にいたずらをする生徒もなく卒業まで保管されている。この物資を使わなくても良い日々が続くことを祈りつつ。
	特記事項	1 ICT 教育について、最新式の電子黒板の全教室入れ替えを行った。 2 接続する高等学校のダブルディプロマコースへ進学するためのＤＤ進学コースを設置した。 3 西館校舎の老朽化により 2026 年度に向けて新館校舎建築を行う。 4 保護者・地域のニーズから 2026 年度より通常授業 5 日制・2 学期制を実施するため、教育課程や学校行事を精査していく。		